



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861

洋光台キリスト教会内（蛭川明男牧師）／●世話人会代表 中條 智子

●事務局長 播磨 聡（広島キリスト教会 TEL 082-293-8683）

ニャルワンダ語で「ウブムエ」（ubumwe）とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

佐々木さんを支援する会 世話人会新代表

（長住バプテスト教会牧師）

中條 智子

ちゅうじょう ともこ

主なる神は平和を語る

主なる神が何を語られるかを聞こう。

主は平和を語られる

その民に、忠実な人たちに。

彼らが愚かさに戻らないように。

確かに、救いは主を畏れる者に近く

栄光は私たちの地に住む。

（聖書・協会共同訳 詩編 85 編 9～10 節）

前世話人会代表の加藤誠さんからバトンを渡されました。自らの力不足と責任の重さに躊躇しましたが、支援者として私自身成長したいと願って受け取りました。どうぞよろしくお願いします。

私たち「佐々木さんを支援する会」は、佐々木さんのルワンダでの和解と平和構築というミッションの支援者であり協働者だと理解しています。初代の世話人会代表である金子敬さんは、「草の根の支援」を強調されました。その精神は今も変わりません。支援会の働きがスムーズに進むように「世話人会」を設けてはいますが、支援会の代表は、支援会に加わるお一人お一人です。

1994 年、ルワンダで多数派の急進勢力が少数派の壊滅を意図した集団殺戮（ジェノサイド）が起

こりました。当初国際社会は大きな関心を払いませんでした。佐々木和之さんはエチオピアで農業支援の働きをしていた 2000 年、ルワンダを初めて訪ね、大虐殺が残した傷あとの深さに衝撃を受けます。同年 10 月から英国ブラッドフォード大学において、ルワンダ大虐殺後の正義と和解をテーマに研究を深め、現地調査でルワンダをたびたび訪問。2004 年 1 月、平和と和解の働きを進めるためにルワンダに渡ることを決意します。この年 11 月に「佐々木さんを支援する会」が発足しました。ルワンダに移住後、佐々木さんは現地キリスト教 NGO の REACH (Reconciliation Evangelism And Christian Healing for Rwanda) と協力して、「償いのプロジェクト」（虐殺罪受刑者による被害者のための家造り）、「癒しのセミナー」「修復的正義セミナー」の実施による癒しと和解の活動を続けます。並行して、2011 年 1 月に PIASS（プロテスタント人文・社会科学大学）の平和学教員として迎えられ、「平和・紛争研究学科」の立ち上げに着手します。非暴力による社会変革を構想できる新しい世代が民族や国籍を超えて協働するビジョンのもと、教育に取り組み、近隣諸国や日本か

らの留学生も積極的に受け入れます。最近では、佐々木さんのもとで学んだ学生が平和構築の働き人として従事し、さらなる研鑽が積まれるようになりました。また、養豚プロジェクト、「ニャンザの光」平和と生活向上プロジェクトも着実に進められています。

このように佐々木さんの活動は、支援会発足からの15年の間にもREACHからPIASSへと広がり、さらにはアフリカ大湖地域の平和構築へと広がりました。佐々木さんからは、この会報「ウブムエ」を通して、被害者と加害者を隔てるものは何か、隔てはいかにして越え、取り除かれるのか。双方へのていねいな関わりと和解のプロセスへの伴いの中で、そこで起きる出来事が伝えられてきました。また、排除や抑圧、喪失を経てきた若い人たちが、自分に起きたことを学び、語る力を得ていくことで、平和構築の働き人として整えられていくという出来事を見せていただきました。これは私たちにとって大きく揺さぶられる恵みの経験です。

また「佐々木さんを支援する会」は、日本のキリスト教会のみならず、平和構築を自身の課題と

する方たちや、若い人たちを育てる使命を持つ方たちとも、深いつながりが与えられてきました。当初、世話人会の目標は500名の支援者でしたが、いまや1000人を超える個人・団体の方たちが支援に加わり活動を支えています。佐々木さん支援という一点でこれだけ多くの方たちが集まり、つながり続けるのは奇跡といえます。佐々木さんのビジョンが多くの方たちの心を捉えて、ともにルワンダの出来事に希望をみたいという願いに動かされるからでしょう。

私たちは、「主なる神」がルワンダで、またこの地において語られる言葉を、ともに聞いていきたいと願います。主は平和を語られます。私たちは、人ではなく神を畏れる者でありたい。ほかならぬ神の栄光こそが顕されることを、願っていききたいと思います（聖書・詩編85編9～10節）。

佐々木さんの働きがこれからも安定的に続けられますように、ぜひとも継続してご支援をよろしく願いいたします。またどうぞ、新しい方たちを支援会にお誘いください。

みなさまがたに、上よりの祝福をお祈りいたします。

「新たな一步を踏み出して」

佐々木 和之

さ さ き か ず ゆ き

皆さまこんにちは。ご存知のようにルワンダは4月7日にジェノサイドの25周年を迎えました。近年の都市部における目覚ましい発展と、女性の権利の拡大や環境保護政策等、刮目すべき社会改革ゆえに「アフリカの奇跡」とも呼ばれるルワンダですが、今年も数多くの犠牲者追悼のための集会に参加する中で、未だに癒されない痛みと悲しみが、明らかに becoming になっていなかったり、語る事ができない真実があることを知らされています。

女性たちにとっての大きな一歩

ジェノサイド記念期間が始まる約1カ月前、ウムチョ・ニャンザ（ニャンザの光）の女性たちに関して特筆すべき出来事があったので報告します。ニャンザ郡内のムパンガ刑務所に収監されている2名の虐殺加害者を5名の女性たちが訪問しました。2名は加害者の妻たち、残りの3名は虐殺生存被害者の女性たちでした。同僚のセルジ・ムブニさんと日本人留学生1名も彼女たちに同伴しました。

生存被害者の女性たちは、共に働いてきた加害者の妻である女性たちへの連帯の印として、以前から刑務所を訪問したいと語っていました。しかし、多くの家族を虐殺で失ったばかりか、自らも大きな傷を負った女性たちにとって、直接の加害者がいる刑務所を訪問することには心理的に大きな障壁があったのでした。しかし、今回その訪問を実現したことは、彼女たち自身にとっても加害者の妻たちにとっても、大きな一歩になったに違いありません。訪問した刑務所の所長によると、このように生存被害者と加害者の妻たちが一緒に刑務所を訪ねたのは初めてのことであったと言います。女性たちは、今度は他の仲間の夫がいる別の刑務所の訪問を計画しています。

ジェノサイド記念会 at ニャンザ

5月2日、娘の萌が企画した「平和構築スタディーツアー」の一行18名とPIASSの学生たち20名と共に、ウムチョ・ニャンザのジェノサイド記念式典に参加しました。参加者皆で献花台の周りに集い、1分間の黙祷の後、参加者一人一人、女性たちが準備した盛花、花束、一輪花を捧げました。虐殺生存被害者の女性たちは、一人一人、失われた家族、親類、友人たちの一人一人の名前を挙げて追悼します。中には嗚咽を抑えられず、うずくまってしまう女性たちもいました。ルワンダでは毎年、数多くのジェノサイド記念式典が実施されるのですが、ほとんどが政府や軍の要人が出席するなどとてもフォーマルなものです。そのような式典は、犠牲者を悼んだり遺族を慰めたりといったことよりも、ジェノサイド否定論者と見なされる人々を糾弾したり、ジェノサイドを終結させた現政権を称揚するといった政治的な色彩の濃いものになっています。

そのため、ニャンザの女性たちは長い間、ジェノサイドで失われた愛する人々の死を心から悼み、心ゆくまで泣くことができずに来たのです。しか

し、仲間たちと約5年前に花づくりをはじめ、自前のジェノサイド記念会を開くようになりました。今年はその4回目でした。生存被害者の女性たちの深い悲しみはそう簡単に癒えるものではなく、今年も涙が涸れることはありませんでした。しかし今、数年前とは決定的に違っていることがあります。それは、この女性たちが悲しを共に担い、慰めてくれる他の女性たちを得ているということです。今年も、生存被害者の女性たちの傍に立ち、涙を浮かべながら、悲しみに打ちひしがれる仲間の女性たちの手を握ったり、肩を抱いたりする加害者を夫として持つ女性たちの姿がありました。私はこの記念会で、つい数年前まで敵同士であった女性たちが、今は友となり、共に支え合っているという奇跡を見たのでした。

今回の記念集会では、もう一つ嬉しいことがありました。それは、ニャンザの女性たちが、恵と日本人留学生4名に、ルワンダ人女性の正装であるムシャナナを着て記念会に参加して欲しいと要望したことです。恵と学生たちはウムチョ・ニャンザの工房に立ち寄り、女性たちが準備してくれた貸し衣装のムシャナナに着替えてから記念会に参加しました。確認したところ、「あなたたちは私たちの大切な仲間。お客さんではない」、とのメッセージが込められていたことが分かりました。恵と日本人留学生たちは、ニャンザの工房に週に一回通い、女性たちと共に、ブックカバーや“がま口”作りなどの活動に取り組んできました。その積み重ねがあったからこそ、「この大切な日に私たちと一緒にムシャナナを着て欲しい」と言ってく



れたのだと思います。たとえ慰めの言葉をうまく掛けられなかったとしても、悲しむ仲間に寄り添ってその場所に共にいること。そんなシンプルながら大切なことを深く学ぶことのできる一日となりました。

ピースビルダー育成支援

この度支援会として「ピースビルダー育成支援費」への寄付を呼び掛けてくださることになりました。PIASS平和紛争研究学科の目的は、ルワンダを含むアフリカ大湖地域において、非暴力による社会変革と平和構築のために、協力して働く若者たちを育成し、彼らのネットワークを作っていくことです。この目的のために、「平和のために働きたい」との情熱を持った学生たちを集めることが、私の大切な任務の一つです。しかし、その上で大きな障害となるのが経済的な問題です。

PIASSで3年間の学士課程を修了するために必要なお金は授業料に15万円、寮費と食費を含めた生活費に15万円程度、合計約30万円です。しかし、年間10万円の費用を子ども一人の大学教育に割くことのできる家庭は富裕層に限られます。学生がアル

バイトとしてできる仕事も殆どありません。必然、大学に行くことができるのは、経済的に豊かな家庭の若者たち、奨学金を獲得して学ぶ若者たち、あるいは比較的良い給与の仕事をしながら、夜間や週末のコースで学ぶ人たちということになります。

プロジェクトの内訳のうち最も大きなものが、平和紛争研究学科で学ぶ学生たちへの奨学金 60万円です。これにより、24名の学生たちに年間授業料の半額を支援することができるのです。熱意を持って学びながらも、授業料が払えずに大学を去っていく若者たちを、これまで私は何度も見てきました。そのような学生たちを一人でも少なくしたいと願っています。その他、学生たちが自主的に平和構築活動を進めていくのを支援するために、育成費として60万円（学生団体ピースクラブの活動費、PIASSでのワークショップ開催費、交換留学生として東京外国語大学で学ぶPIASSの学生たちが平和学習ツアーとして広島・長崎・沖縄などを訪ねるための費用）です。ぜひとも合計120万円が集まりますように、ご協力をよろしくお願いいたします。

「日本留学で心に残っていること」

昨年9月から東京外国語大学にPIASS平和紛争研究学科より留学中

イシャーツェ エリー
ロドリグ

支援する会の皆さま、アマホロ！東京外国語大学（以下、外語大）で学生生活を始めてから7ヶ月が経ちました。10月から始まった最初の学期は、寒さや孤独感、言葉の壁、教室の場所が分からないなど多くの困難に直面しました。ようやくその学期の終わりに外語大での生活や寒さに慣れることができました。春休みからは、宗像財団でインターンシップを始めました。その団体は、アフリカの国を含めた発展途上国において貧困削減や女子教育の向上を目指した活動を行っています。

自分に与えられた仕事を通し、実践的な知識と経験を積みながら楽しく働いています。現在は新学



聖書研究会の仲間たちと

期3週目です。春を迎え、たくさんの友達もでき、合唱クラブ、聖書クラブ、賛美集会、そして外国語学習グループなどの課外活動にも参加しています。外語大での生活は本当に良い思い出になると確信しています。

これまでの日本滞在でとても印象に残っていることをいくつかお伝えします。一つ目は、年配の方々とは交流して感じたことです。日本では70、80代の方々がとても元気で本当に驚きました。英会話グループに所属されていたり、買い物上手だったり、毎朝ウォーキングをされたり、新聞をととてもよく読まれたりと活発に活動されていました。そうした年配の方々は、心に余裕を持ち人生を楽しんでいるように見えました。さらには、若者よりも社交的であるような印象を受けました。最も驚いたのは、84歳の女性が自転車に乗っておられたことでした。

二つ目は、昨年PIASSに留学していてルームメイトだった佐藤航平君から招待されて、先週、茨城を訪問したときのことです。私はそこで、東京での生活とは全く異なる生活を経験しました。訪問先には大きな農場や大きな庭、大きな公園、大きな家々がありました。そして、航平君の弟は、「茨城では東京よりもコミュニティを大切にした生活が営まれているんだ。誰かと会ったら必ず挨拶をして、知り合いになるんだよ」と教えてくれました。茨城滞在中はまるで自分がルワンダかブルンジにいるような心地がしました。

三つ目は、寒い冬の後に訪れる春の素晴らしさについてです。春に経験したことの中で一番忘れられないのは、早朝の朝日です。私の部屋は朝6時ごろになると、朝日がまっすぐ差し込んできます。気持ちよく寝ているときでも、急に暖かい空気が体を包むのを感じ、とても心地よいです。6時半になると、私は起きて朝のデボーションを始めます。晴れた暖かい部屋の中で聖書のみことば

に思いを巡らすことができるのは素晴らしいことだと思います。私は生まれて初めて、「太陽を創ってくださいありがとうございます」と神様に感謝しました。私の生まれ故郷であるブルンジの首都、ブジュンブラでは、年の最低気温が24度もあるので、家の気温を暖かく保つ、という太陽の役割の大切さなど考える必要はありませんでした。私にとって太陽は、暖めてくれるものではなく、焼き付けるようなものでした。

日本の教会の皆さまとも親しくお交わりをいただき、とても良い経験をさせていただいています。4月14日には東京の大井バプテスト教会で、私とシュクルさん、そして日本で出会った友人たちが協力し、ルワンダの虐殺25周年を憶えての特別礼拝を開くことができました。まず初めに、特別礼拝の実現のために尽力して下さった原口建さん、フーシー宣教師ご夫妻、大井バプテスト教会の皆さま、そして参加者の皆さまに感謝申し上げます。

多くの皆さまがご参加くださったことに驚きました。単に人数の多さだけでなく、皆さまが深い思いと祈りを持ってその礼拝に参加して下さったことに深い感銘を受けました。多くの皆さまが、私たちの言葉に真剣に耳を傾け、共に祈りと賛美を捧げ、礼拝の後には私たちに言葉をかけて励まして下さいました。私たちがキリスト・イエスにあって一つの身体であることを改めて感じる時となったとともに、私自身、クリスチャンとしての人生と平和構築の関りについて深く考える機会となったことに感謝しています。

その礼拝で語られたメッセージや証に深い感銘を受けました。フーシー宣教師のメッセージとシュクルさんの証では、私たちクリスチャンがどのように過ちを犯してきたのか、そして、どのように弱さを持つ存在なのかについての告白がなされました。それらを通し私は、「権力者による邪悪な行いに敢然と抵抗することができるだけの信仰を、私は果たして持っているのだろうか」と問われました。「もし腐敗した指導者が私に誰かを殺すか自

分が殺されるかを選べと迫るなら、私はどちらを選ぶだろうか？十字架上で死なれたキリストを信じる者として、他者を殺すのではなく、彼らのために死ぬことなど私にできるのだろうか」と問われたのです。私にとって政治的な弾圧や殺戮は決して遠い世界のことでありません。記念礼拝は、私がクリスチャンのピースビルダー（平和構築活動家）として、これらの問いかけにどのように答えることができるのか、自分自身を深く問い直す機会を与えてくれたのでした。

集会の終了後、しばらくの間、多くの方々からその日のことについて言葉をかけていただきました。ある方は、ルワンダで25年前に起きたことが日本や世界で今起きている事柄と繋がっていることが良く分かった、と話して下さいました。私はその言葉を聞き、今回友人たちとの会を企画して本当に良かったと思いました。私たちは、まさにそのことを感じ取っていただきたいと願いながら、記念礼拝の内容を準備したのでした。私たちの生きる世界は、差別的な政策・言動と憎しみに満ち溢れています。ですから、私たちが過去の虐殺を

記念する時には、必ず今日私たちが乗り越えるべきそれらの課題についても考えなければならないのです。

今回は、日本で学んだことの中で、ぜひルワンダやブルンジに持ち帰って仲間に分かちあいたいと思っている事についてお伝えしたいと思います。支援会に連なって下さっている皆様、最後になりましたが、私からも“ピースビルダー育成支援費”への募金をお願いいたします。私は2016年より支援会の皆様からの奨学金によりPIASSの授業料が免除され、健康保険にも加入することができています。また、沖縄で平和学習をすることもできました。PIASSでの平和紛争研究学科の授業や、私がリーダーを務めていたピースクラブでの活動など通して、アフリカが直面している課題に対する理解が深まったと同時に、卒業後自分が貢献できることは何であるのか段々と明確になってきています。皆様方のご寄付がルワンダやその周辺国の若者たちの良い助けになることを願っています。

ムジレ アマホロ！（平安が皆さまとありますように！）

ルワンダ虐殺を憶（おぼ）える受難週タ礼拝



2019年4月14日、「ルワンダ虐殺を憶える受難週タ礼拝」が大井バプテスト教会で行われ、87人が出席した。この集会はPIASSからの留学生二人と友人たちが企画し、大井バプテスト教会が協働する形で実現した。礼拝では、今なお虐殺の傷跡に苦しみつつも、和解への歩みを進めるルワンダのために祈りをささげ、留学生のムレカテ・シュクルさんが証しを、イシシャツェ・エリー・ロドリグさんが賛美と祈りをささげた。CBF宣教師（Cooperative Baptist Fellowship Field Personal）のカーソン・フーシーさんが説教した。

「ルワンダ大虐殺を憶えて」(翻訳：原口建)

ムレカテテ・
シュクル

昨年9月から東京外国語大学にPIASS平和紛争研究学科より留学中

兄弟姉妹のルワンダという国のことを聴くときに、多くの人が真っ先に思い出すのは1994年に起こったツチ族の大虐殺です。この事件によって私の国は世界に知られることとなりました。私はそのことを悲しく思いますし、皆さんにもそれは理解していただけたと思います。自分の故郷がこのような残虐な事件で有名になってしまうのは、どの国にもあってはいけないことです。

ルワンダの虐殺は、国連によって1994年ツチ族への大虐殺と命名されました。しかし、ツチに対する差別や殺戮はそれ以前から起こっていました。1959年には多くのルワンダ人が身の危険を避けるために故郷をあとにしました。そしてルワンダの状況は悪化していきました。1994年のツチ族大虐殺は、そこから始まったことの結末です。

虐殺が起こる前、「民族」というまやかしによって私たちは分断され、多数派のフツと少数派のツチ、という対立が生まれました。状況が緊迫するなかで、私の祖父母や親せきたちは1959年に国を出てタンザニアに行き、難民として30年ほどを過ごしました。私の両親はタンザニアで育ち、私もタンザニアで生まれました。虐殺が落ち着いたあと、私たち家族は祖国へと戻る決断をしたのです。

小さかったときから、私は虐殺についての様々な証言を聞いてきました。子どもだった私には理解できないこともありましたが、恐ろしい話でした。虐殺を憶える期間には、これまでに聞かされた話を思い出し、悪夢にうなされて眠れないこともありました。

この影響は私の心にも現れています。私は、たとえ親友であっても悲しみに打ちひしがれる人を助けることができませんでした。やがて私は、自分自身、そして他の人たちを助けるために、平和と紛争について学ぶことにしました。



実際のところ、大勢のルワンダの人々が同じような心の問題を抱えています。私には姉のように慕っている親友がいます。彼女の家族で虐殺を生き延びたのは彼女一人でした。私には、彼女がいま、気持ちが暗くなる時期にある事が分かります。私が近くにいれば、彼女を慰めることができるのに、と思います。彼女のことは、他の人たちと同じように、毎日のお祈りのなかで覚えています。

私がこの虐殺を憶える期間を地元以外で過ごすのは、初めてです。たくさんの疑問が頭のなかを巡っています。いま、ルワンダはどんな雰囲気なんだろう。家族、友人や近所の人たちは、うまくやっていけているだろうか。私はそのような不安と混乱を抱えています。一言で言えば彼らのことが心配なのですが、祈ることで私もまた支えられ、日本での勉強を続けることができています。

最後に、虐殺について私が一番混乱していることを皆さんと共有したいと思います。それはキリスト教のことです。94年当時、ルワンダでは人口の約90パーセントがクリスチャンでした。しかし、教会は正義を守ることがせず、教会の指導者や信徒は、同じクリスチャンである人々の殺害に参加しました。私がつけている疑問はここにあります。

「キリスト教には、虐殺やその他の残虐行為に対

して闘いを挑めるほどの強さがあるだろうか。」

ルワンダや世界の国々が混乱し、何をどのようにすればいいのかわからない時代ですが、神さま

の助けがありますように。

皆さんに神さまのご加護がありますように。ありがとうございました。

「丘に向かって目を上げよ」詩編 121 編

カーソン・
フーシー

紙幅の関係で、ご本人の了承のもと、説教前半のイエスが十字架刑に処せられていく部分は割愛させていただきました。(翻訳：原口建)

兄弟姉妹の皆さん、私は日本バプテスト連盟の教会との協働のために 2013 年に日本に来ました。以来、佐々木先生とその学生たちがルワンダの和解と平和のために働かれていることに敬意を憶えてきました。今日、この 25 年前の悲劇を憶える礼拝でメッセージをする機会を与えて頂いたことに感謝します。(中略)

25 年前のルワンダでは、民族紛争が激しくなり、大きな悲劇へと発展しました。

家族や友人は一晩で敵になりました。ツチは「ゴキブリ」だと喧伝され、路上でもラジオでもヘイトスピーチが広がりました。理屈や道徳は放り投げられました。そして真つ当な精神を持った人たちでさえ群集心理に侵され、悪によって支配されたのです。

教会はもはや集会場ではなく、殺戮の現場となりました。100 日に及んだ虐殺ののち、通りは 80 万人ものツチ、また過激派に従わなかったフツの男性、女性、そして子供たちの血で覆われました。権益を守るために作られたおとぎ話を正当化するために、それまで想像もできなかったような方法で罪のない人々の血が流されました。

人類の歴史は、悪によって人々の心が侵され、同じ人間に対して言葉に尽くせないような暴力をふるう出来事で満ちています。

どの大陸でも規模は違えど、似たような殺戮が行われてきました。そこでは、こいつらは人間以



下の存在だ、という喧伝がなされ、神の創造物というアイデンティティが奪われます。そのようにして社会を守るためには暴力、そして殺人さえも必要だとされる環境が作り上げられていくのです。

私たちは自分自身がそのような極端な行動をとることは想像できないかもしれませんが、しかし私たちは全員、何が神の目に正しいのかを知らず、隣人に対してそして主に対して罪を犯す存在です。

私たちが、この集会を準備するために話し合いをするなかで、シュクルさんとロドリグさんは 25 年前のルワンダ虐殺のことを話してくれました。シュクルさんが先ほど証されたように、私たちクリスチャンにとって特に衝撃的なのは、神の創造物である人々が大量に殺されたことはもとより、その殺人にキリスト教の信仰者たちが果たした役割のことかもしれません。

フツ達は、礼拝に出かけると教会の入り口にナタを置き、神をみんなで賛美したあとに、入り口

のナタを再度手に取り、隣人を殺しに出かけたといひます。その隣人とはイエスが「自分を愛するように愛せよ」と言ったまさにその人たちです。司祭や牧師たちは、宣教のなかで殺人を認めるようなことを教え、教会に逃げ込んだ人たちを殺人者たちに引き渡しました。そして時には教会の中で何千人もの人たちが殺されました。

殺人に直接的に関わっていなくても、悪を目の前にして行動を起こすことが出来なかったクリスチャンが大勢いたことは事実です。虐殺が行われた100日の間、14回の主日がありました。そのとき、信徒たちは神を讃え、神の言葉を学びました。そして家に帰ると、自分たちのコミュニティを粉々にしている権力に立ち向かうことをしなかったのです。彼らは「自分たちの中で最も小さくされたもの」に背を向けてしまいました。

2000年前のエルサレムで人々が信仰を守ろうとしたように、あるいは1994年のキガリで自分たちの部族の権益を守ろうとした人々のように、権力と富そして自らの保身は今も私たちの耳に優しくささやき、恐ろしい結末へといざなっています。

悪は誰のことも区別なく、考えをコントロールできます。それは必ずしも、銃や砲弾や石をつかって隣人に危害を加えることではないかもしれません。自分たちと違う見た目、考え方、話し方を持つ人たちを貶める、というような単純なことかもしれません。

あるいは友人を支えるふりをして、内心は自らの成功を求めることかもしれません。自分の生活スタイルを変えるのを嫌がり、助けの必要な人がいても見て見ぬふりをするかもしれません。意識的、あるいは無意識に関わらず、私たちはみな悪に染まっている、あるいは悪に染められる可能性を持っているのです。

この40日間の受難節のあいだ、世界中のクリスチャンはイースターに向けて、自らを振り返り、心を静めます。私たちは、どのように私たちが神

から自らを引き離したのか、想いを馳せます。そして悔い改め、主に赦しを乞い、和解させていただけに祈ります。心にいつも暗闇を抱え、その闇に引き寄せられている私たちが、いったいどうすれば正しい道を歩むことができるでしょうか。それには丘に目をあげ、天と地の創造主、私たちを守ってくださる主に助けを求めることが必要です。

日本語聖書で詩編121編1節に出てくる言葉は「山」です。ギリシャ語では「Har」ですが、英語では「山」とも「丘」とも訳されています。数年前、イスラエルを訪れたときに見たのは、日本アルプスのような山々ではなく、目の前いっぱいに広がる丘でした。今回の聖書理解では、この箇所目目をあげる先を「丘」に置き換えて読みたいと思います。

私たちが暗闇に包まれ、私たちの命を奪おうとするとき、私たちはどうすべきでしょうか？

私たちは丘に目をあげ、ロバに乗って丘を越え、街へと向かったイエスに想いを馳せます。イエスはその週の終わりに自分を待ち受けていた宿命を知りつつも、その道を歩みました。私たちは彼に従い、平和と愛のうちにこの命を全うし、すべての神の被造物を愛するものです。

私たちは、イエスが人類の罪を背負ったゴルゴタの丘に目を向けます。そして私たちの罪が赦されていること、私たちを神の無限の愛から引き離すことは出来ないことを思い返します。

最後に、私たちはガリラヤの丘に目を向けます。そこでイエス・キリストは天に昇ったのです。イエスは私たちを真理へと導く聖霊が私たちの内に宿っていることを知っていました。そして主の霊は、私たちにイエスの教えを明らかにし、私たちを真理へと導いてくださいます。

兄弟姉妹たち、今夜私達は25年前にルワンダで失われた80万人の死を悲しみます。

私たちは憎しみにより負わされた体の傷、そして心の傷に今も苦しむ人たちの祈りに祈りを合わ

せませす。そして、家族や友人を失った人のために祈りを合わせませす。善悪の意識を失い、悪によって押し流された人々のために祈りを合わせませす。

痛みと悲しみの中でなお、私たちは明るい未来を望みつつ、祈りを合わせませす。

平和と和解の中で前へと進もうとしているルワンダが、山々に囲まれた地形から「千の丘の国」と呼ばれているのは、なんとふさわしいことでしょうか。ルワンダであらわされている主の御業を知ってなお、私たちがルワンダの人々と一緒に希望をもって前へと進むことが出来ないなんて、そんなことがあるのでしょうか？

そして今夜集まった皆さんと共に、私たち自身、そしてこの世界に対して明るい未来を待ち望

みたいと思います。2000 年前にキリストの光を封じ込めようとした暗闇は、イエス様が墓から復活した朝に打ち破られました。それはイエスを信じるすべての人にとっての希望です。何が正しいのか見失ったときは、目を丘へと上げてください。罪を犯して、自分が神の恵みにふさわしくないと思うときは、目を丘に向けてください。あなたが他の人の行いを許すことができないと思う時、丘を見上げてください。キリストの光はあなたに愛を注いでくださるでしょう。私たちを創造し、救い、そして守ってくださる神様の恵み、平和、そして愛の中で、丘に目を向け、明日への希望を持ってこの信仰の旅路を歩んでいきましょう。アーメン。

「ルワンダ留学を終えて」

佐藤 航平

さとう こうへい

国際基督教大学4年生。PIASS平和紛争研究学科に一年間留学。

私はこれまでに、国際協力の分野で働く父の仕事の都合で、アフリカに長く滞在した経験がある。もう一度アフリカに行きたいと思い、大学4年でルワンダ留学を決めた。2017年9月~2018年9月の1年間をルワンダで過ごした。留学生生活を振り返ると、ルワンダに行くことができ、心からよかったと思っている。そこででの学びは、今後の私の人生に多くの影響を与えていくと感じている。今回の報告書では、留学生生活を通して、「平和」について深く考えさせられた学びを三つ共有したい。

一つ目の学びは、授業を通しての学びだ。PIASSの平和構築学部では、平和や紛争に関する科目を多く履修できた。これまでに、「平和」を体系的に学ぶ機会がなかったため、基礎的な知識から複雑な議論まで学べた事は、とても勉強になった。その中でも、深く学びを得た授業が、「和解の理論と実践」という授業だ。和解に関して、アカデミッ

クな学びに加え、実際に和解と向き合っている方々のお話を聞く事が出来たこの授業では、文字通り理論と実践を学べた。また、特に忘れられないのは、クラスメイトとジェノサイド記念館に訪れた時の事だ。その記念館には、ジェノサイドに関するパネルの展示のみならず、ジェノサイド犠牲者の遺体も展示されている。一通り展示物を見た後に、その遺体の展示室に向かったのだが、突然一人のルワンダ人学生が大声をあげて泣き崩れた。彼は、ジェノサイドで自分の家族を殺されていた。他のルワンダ人学生も続いて涙を流していた。その時、私はルワンダの人々が抱える虐殺の傷の深さを目の当たりにした。その後の感想を共有する時間では、自分の家族が殺された経験や自国の内戦により難民となった経験をコンゴ人学生やブルンジ人学生も話してくれた。私は、ただその場にいて聞くことしかできなかった。今まで一緒に学び、仲良くしていた友人たちが抱えていた

心の傷や悲しみを私は知らなかったのだ。彼らにとって、平和がいかに重要で切実な問題であるのか、その時やっと理解することができた。

二つ目の学びは、寮生活での交わりを通してだ。私は留學生活の後半を、大学の学生寮で過ごした。アフリカの学生との共同生活は毎日が貴重な時間だったが、中でも忘れられないのは、毎週月曜日に寮に住む学生と持っていたキリスト教の祈り会だ。1時間ほどの祈り会では、毎回一人の学生がメッセージをし、みんなで祈り、ワーシップソングを歌っていた。集会には、国籍も様々な十人前後の学生が参加しており、お互いの事や家族の事、それぞれの国の事など、共有し祈り合った。アフリカの学生と、自分の根本にあるキリスト教の信仰について語り合った経験はかけがえのないものだった。私は時に、集会の中で、その場にいるメンバーが一つに繋がっているなんとも言えない一体感を覚えることがあった。それはキリスト教の信仰を中心とした輪がそこにあることを感じさせる瞬間でもあり、国籍の違いや日々のしがらみや苦悩を超えてその場にいる人々が一つになれる、とても平和な瞬間でもあった。この経験は、私の信仰生活を豊かにしてくれただけでなく、国籍を超えて一つになれる平和の感覚を教えてくれた。

第三の学びは、ウムチョ・ニヤンザの女性たちを通してだ。毎週水曜日、ニヤンザ郡に住む虐殺加害者を夫に持つ女性と虐殺生存者の「和解と生活向上のプロジェクト」のお手伝いをさせてもら



週1回の祈り会の後で

った。一年を通した女性たちとの交わりは、私の中ではとても特別な経験として残っており、和解の実践を見ることができた体験だった。ルワンダに渡航する前、殺し殺された人々が共生することは不可能であると思っていた。しかし、ウムチョの女性たちは、過去の暗い歴史を乗り越え、共に生きていくことを選び取っていた。女性たちのジェノサイドの体験は決して単純なものではなかった。直接加害と被害の関係にある女性たちもいれば、そうでない人もいる。ジェノサイド生存者の中には、虐殺で家族を殺され、レイプされた経験を持つ方もいる一方で、家族を誰も殺されなかった人もいる。参加している加害者を夫に持つ女性も、彼女たちが直接殺しに関わった訳ではない。現政権のルワンダ愛国戦線側の攻撃で家族が犠牲になった人もいる。留學終了間近、何人かの女性たちにインタビューをする機会があった。その中で多くの女性たちは、ウムチョ・ニヤンザに参加する前、お互いに憎しみや負い目を感じていたと仰っていた。けれど、活動と一緒にいる中で、それまで加害者側と生存者側で別れていたグループが、ウムチョ・ニヤンザとして一つになったという。今ではお互いに困っている事があれば助け合う関係になっている。女性たちの交わりを通して感じさせられたのは、和解は向き合っていく過程であるという事。ジェノサイドの悲しみはそう簡単に消えることはなく、過去の過ちもなくなる事はない。全てを赦し赦されることは難しい事だが、だからこそ関係を断つのではなく、お互いに向き合っていく事を選んだ女性たち。その過程の中で、自分とも向き合い過去から解放されていく。お互いに向き合い、自分とも向き合う、その過程が和解にある事を学んだ。争いがない状態ではなく、共に生きるという意味での真の赦しと和解。過去を乗り越えることはとても時間がかかる作業ではあるが、その先にある自由や平和に向かってウムチョ・ニヤンザの女性たちは歩んでいるのだと感じた。

この一年間は、様々な場面で「平和」について

学ぶ事が多かった。ルワンダでのそれらの学びは、全てルワンダで出会った人々から教えてもらった事だ。留学生生活は人との繋がりに恵まれた一年だった。出会った人々は、皆優しく、僕をコミュニティの中に受け入れてくれた。時には、ぶつかる事や嫌になることもあったが、それでも人々を通

して、僕の留学生生活は実り多いものとなった。人との関わりにおいて争いはなくなる事はないのかもしれないが、それでも諦めず共に生きる中に平和の芽があるのだと思う。ルワンダでの出会いを大切にし、私も平和の芽を持った繋がりを広げていきたい。

事務局からのお知らせ

- 世話人会代表は、加藤誠さん（今年4月に日本バプテスト連盟理事長に就任）から中條智子さんに代わりました。
- 佐々木和之さんの今年の帰国は、11月中旬から12月の約一カ月を予定しています。報告集会を希望される方は、事務局長播磨聡(082-293-8683)にご相談下さい。

● 昨年に続き、PIASS 平和紛争研究学科学生 2 名、東京外国語大学に留学！

東京外国語大学（現代アフリカ地域研究センター）に、PIASS 平和紛争研究学科（学科長 佐々木和之）で学ぶ留学生 2 名が昨年 9 月から約一年間、留学しています。今年秋には、二回目となる留学生 2 名が来日します。昨年ご協力いただいたクラウドファンディングで渡航費や生活費の一部が補助されます。学びのためにお祈り下さい。また諸教会・諸団体で留学生から話を聞く機会の提供などご検討ください。

● 新設「ピースビルダー育成支援費」(120 万円)への寄付をお願いします！

支援会では、佐々木さんが取り組む“平和構築を将来担う若者を育成する活動”に、皆様の支援金を用いてきました。しかし、支援会や積立金が減少する中で、このための支出が困難になってきました。そこで、この活動を継続するために、「ピースビルダー育成支援費」への寄付をお願いすることにいたしました。内訳は、学生奨学金（PIASS）60 万円と育成費 60 万円（ピースクラブ活動費、機材購入費、ワークショップ開催費、来日留学生研修費）の計 120 万円です。振替用紙に「育成支援」と明記してお送りください。ぜひ、よろしくお願いいたします。

- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

- 佐々木さんを支援する会HP（ホームページ）

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真等。HPから入会手続きも可能です。
佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

- 世話人会 中條智子（長住教会牧師）、加藤 誠（大井教会牧師）、播磨 聡（広島教会牧師）、蛭川明男（洋光台教会牧師）、米本裕見子（日本バプテスト女性連合幹事）